

ゲス・フー／招かれざる恋人

2005(平成17)年9月7日鑑賞(東映試写室)



監督＝ケヴィン・ロドニー・サリヴァン／出演＝アシュトン・カッチャー／ゾーイ・サルダナ／バーニー・マック／ジュディス・スコット (20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／106分)

第2章

映画は楽しめるのが一番！

……まもなく両親の結婚25周年を祝う銀婚式。その席で婚約を発表しようとしている黒人娘の家に招かれた恋人は、父親の信用調査によれば完璧な男だが、何と白人だった。そこから始まる男同士のバトル(?)をたっぷりと……。1968年にシドニー・ポアチエと共演し、キャサリン・ヘプバーンがアカデミー賞主演女優賞を受賞した名作『招かれざる客』との対比もお忘れなく……。激しくも楽しいさまざまなバトルの末に最後に勝つもの、それはもちろん愛……。

どこかで聞いたことのあるタイトル……？

この映画のタイトルは『guess who』だけだが、邦題では『招かれざる恋人』というサブタイトルをつけて、よりわかりやすくしている。どこかで聞いたことのあるタイトルだと思っていると、何とシドニー・ポアチエとキャサリン・ヘプバーンが主演し、キャサリン・ヘプバーンがアカデミー賞主演女優賞を受賞した1968年の名作『招かれざる客』(製作は1967年)を下敷きにしたもの……。

1968年という時代

この『招かれざる客』は、白人女性と黒人男性との結婚をはじめて真正面から見据えた問題作だったが、この1968年という年は、アカデミー賞作品賞にノミネートされた5作品のうち、『夜の犬捜査線』と『招かれざる客』の2本が人種差別をテーマとしたものだったし、『俺たちに明日はない』と『卒業』の2本がア

メロ・ニューシネマの先駆けとなった、今でも有名な作品が選ばれた年。まさに映画が激動の時代を反映していることがよくわかる。ちなみに私が大学に入学して下宿し、自由な青春時代を謳歌し始めたのが1967年4月だから、1968年はまさに青春真っ盛りの時代……。

そんな時代のそんな有名な作品を下敷きにするのは大変だと思うが、この名作をコメディ風に、しかし心暖まるものに衣替えできないかと企画したのは、父親役を演じたバーニー・マック。娘がはじめて連れてきた婚約者の男性が、全く予想しなかった白人だったとしたら、さて……？

「銀婚式」の「誓いの言葉」ってホント……？

映画の冒頭シーンは、銀行の融資担当として立派な実績を誇っているパーシー・ジョーンズ（バーニー・マック）が、結婚25周年の銀婚式で妻のマリリン・ジョーンズ（ジュディス・スコット）に述べなければならない誓いの言葉を練習しているシーンから……。1日1度は「愛してるよ」と言わなければそれが離婚原因になってしまう国アメリカ（？）では、銀婚式ともなると盛大にパーティーを開き、親類縁者を集めた中で誓いの言葉を述べなければならないという設定だが、それってホント……？

「辞めてやる」となった理由は……？

次のシーンは、大手証券会社に勤める、若手ながら凄腕のサイモン・グリーン（アシュトン・カッチャー）が、上司とケンカしているところ。雰囲気から読み取ると、上司は将来を囑望されているサイモンが黒人の娘と婚約・結婚することに反対し、上司から「そんなことをすればこの会社における君の将来にキズがつくよ」くらいのことを言われたらしい。そのため、恋人テレサ・ジョーンズ（ゾーイ・サルダナ）を愛していることに自信を持っているうえ、仕事上でも自分の学歴と実績があればどこにでも就職できると自信を持っているサイモンは「辞めてやる！」ということに……？

しかし、いくら職場の移動が自由な国アメリカとはいっても、こんなこと（？）で辞めたのでは……？ まして、優秀な証券マンともなれば、その業務上

の秘密や顧客情報などの点からも、自由にライバル会社などへの転職はしんどい
のでは……？

アメリカでもやっぱり男は仕事……？

若い恋人同士のサイモンとテレサだが、テレサがサイモンにホレている理由の1つが、サイモンの仕事上の優秀さにあることは明らか。もっとも、妹との間で交わされる女同士の本音の話になると、もっと露骨な品定め(?)もあるが、テレサが父親に自慢するのはサイモンの証券マンとしての優秀さ。そしてこれは、銀行の融資マンとして成功を取めているパーシーには有効な攻め方のはず。ところが、コトもあろうに銀婚式で婚約を発表しようとする直前にその会社をクビになったというニュースが、サイモン本人の口からではなく、あれほどバトルをくり広げていた父親の口から報告されたものだから、テレサがビックリするとともにむくれてしまったのは当然。そうなるともはや、退職したのかそれともクビになったのかは全く論点でなくなってしまうからコワイ……？

男同士の信頼もやっぱり仕事から……？

テレサを守るため(?)サイモンとの間でバトルをくり広げてきたパーシーだったが、銀婚式のパーティーの直前に気がついたのは、「なぜ婚約発表の直前にサイモンが会社をクビになったのか」ということ。そこに気がつくに至るまでの数々のケンカは決してムダではなく、お互いが心底から言い争うことによって、お互いの本音や本性が見えてきたわけだ。そんな「積み重ね」があったからこそ、人生経験豊かな父親のパーシーは、サイモンが会社をクビになった理由にまで考えがたどり着くことに……。

そしてそうなる、もはやサイモンはスポーツもできない頼りない男ではなく、愛する彼女のために上司とケンカすることも辞さない勇気ある男に変身……？
やっぱり男同士の信頼は仕事から、ということか……？

キュートな美女は……？

この映画で、父親の愛と恋人の愛を一身に受けるラッキーな役を演じたゾー

イ・サルダナはどこかで見た顔だと思っていたら、あの『ターミナル』（04年）で入国係官をやっていたチャーミングな美女。彼女はこの『ターミナル』で注目されたことによって、ムービーライン誌でハリウッド若手注目賞に輝いたとのこと。若くて魅力的な黒人女性は、あまり名前を知らないなので、これはぜひ覚えておかなければ……。

日本流で考えれば『破戒』か『橋のない川』……？

アメリカ社会における人種差別は世界的に有名（？）だが、日本人にはそれはあくまで他人（他国）の話。したがって、1967年の『招かれざる客』やこの『guess who』のように自分の息子や娘が違う人種の人と結婚することの大変さなどは、日本人には容易に理解できないはず。日本人は単一民族で、日本は差別のない国……？

いやいや決してそんなことはない。そのひとつは、『パッチギ！』（04年）などたくさんの映画で描かれているように朝鮮民族への差別だが、もっと根が深いのはいわゆる部落差別問題……？

古くは島崎藤村の『破戒』や新しく（？）は住井すゑの『橋のない川』を見れば、部落差別問題についてあらためて真正面から向かい合わなければならないことがわかるはず。

しかし、深刻に向かい合うばかりでは大変だから、この映画のように、少しコメディ風にしかし心暖まるものに日本的な結婚差別の問題を描けないものだろうか……？

2005(平成17)年9月8日記